**「を詠う」　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　山居　閑人**

　昔から、国境を接する国の間では、戦争が絶えることがありませんでした。ある場合は、国土を拡張しようとする権力者の目的の為、その侵入を阻もうとする目的の為に戦争が行われ、多くの兵士が犠牲になりました。このように、生きて帰ることが困難な状態で徴発される農民やその家族の苦しみは、杜甫の「兵車行」や、日本ではあまり知られていない「三吏三別」に詠われております。戦場における兵士や将校達の心情を、いろいろな詩歌によって味わっていただきたいと思います。

辺境に駐在する兵士や将軍の心情を詠った詩は「」と呼ばれます。始めに、このような「辺塞詩」として最も知られているの**「」**を紹介致します。「葡萄酒」「ガラス製のグラス」は、ペルシャ地方から由来した物であり、「夜光の杯」で「葡萄の美酒」を飲むことは、都でなら最高の贅沢であったでしょう。これらを使って宴会を開くと、酒を促すように琵琶の音が聞こえてくる。なんとも、豪華な宴会です。

　しかしながら、これは、明日をも知れぬ命であることを忘れるための悲しい宴会なのです。起句、承句の華やかさを、転句で反転させ、結句で綺麗にまとめ上げた「辺塞詩」を代表する名作です。

**葡萄美酒夜光杯　　　の の**

**欲飲琵琶馬上催　　　まんとすれば にす**

**酔臥沙場君莫笑　　　うてにす うことなかれ**

**古来征戦幾人回　　　 かる**

辺塞詩の作者として有名なのはとであり「」と称されますが、この他にも優れた辺塞詩人でした。

　続きまして、王昌齢の詩を紹介していきます。『唐詩選』に採られている有名な詩は**「三首」**です。

　「其の一」は、望郷の思いを懐いての下に座っているとき、の吹く、寂しい「」の笛の音が聞こえてきて、遠く離れた妻のことを思うと耐えがたい気持になることを詠っています。この詩を紹介致します。

**烽火城西百尺樓　　　 の**

**黄昏獨坐海風秋　　　 りす の**

**更吹羌笛關山月　　　にく**

**無那金閨萬里愁　　　んともする無し のい**

　「其の二」は、うって変わって、戦闘の意欲を詠ったもので、今まで戦いを続けて、鎧にも穴が空くほどであるが、の遙か彼方の地において、鉄の鎧が黄砂により敗れる程多くの戦いをしても、敵地であるを勝ち取るまでは死ぬまで帰らないとの決意を述べています。この詩を紹介致します。

**青海長雲暗雪山　　　の し**

**孤城遥望玉門関　　　かにむ**

**黄砂百戦穿金甲　　　 をつも**

**不破楼蘭終不還　　　をらずんば にえらじ**

　「其の三」は、の「」と同じように、生きて帰ることが困難な身の上である悲しみを詠った物で、最も有名であり、単に王昌齢の「従軍行」と言えばこの詩を意味し、『唐詩三百首』にも「出塞」として採られています。この詩の起句は、古来「絶唱」とされております。は、唐がとの国境と定めた場所であり、として匈奴に恐れられたのような将軍がいれば、匈奴の侵入も無く、兵役に就くことも無かっただろうと詠っております。この詩を紹介致します。

**秦時明月漢時關　　　の の**

**萬里長征人未還　　　 だらず**

**但使龍城飛將在　　　だ のをして らめば**

**不教胡馬度陰山　　　をして を らめず**

『唐詩選』に採録されている王昌齢の「従軍行」は以上の三首ですが、実際には七首の連作です。」これらのいくつかを紹介していきます。

　始めに七首の内、其の二とされているものを紹介いたします。王翰の「涼州詞」と同じように、宴会で舞い踊る様を詠っていますが、詠うのは別れを詠った「」の歌。寂しさを感じさせる詩です。万里の長城を高く懸かった秋の月が照らしているのも、寂しさを増すのです。

**琵琶起舞換新聲　　　にして にう**

**總是關山離別情　　　べてれ の**

**撩亂邊愁聽不盡　　　をしていてきず**

**高高秋月照長城**　 **をらす**

　続きまして「其の五」とされる詩を紹介いたします。

　黄砂で日の色も暗く見える中、夕方に軍旗を半分巻いて出陣したが、既に前衛軍は敵陣を占領し、敵の大将を生け捕りにしたとの報告が届いたとの意気の上がる様子を詠っています。

**大漠風塵日色昏　　　 し**

**紅旂半捲齣轅門　　　 ばいてをづ**

**前軍夜戰洮河北　　　 す の**

**已報生擒吐穀渾　　　にず をすと**

　続きまして、「其の三」とされるものを紹介いたします。この詩は、一日中闘ったが戦況が思わしくなく、やむなく撤退命令を出してもらい、撤退するときの様子を詠ったものです。前の戦で死んだ兵士の白骨が塵で蔽われている凄惨な様子が歌われています。

**關城榆葉早疏黃　　　 し**

**日暮雲沙古戰場**

**表請回軍掩塵骨　　　をいてをえせば をう**

**莫教兵士哭龍荒　　　をしてにさむるかれ**

次に**「」**を紹介いたします。この詩は、辺塞にあって望郷の年を詠ったものです。長安の方角を見渡しても黄河が流れているのが見えるばかり、秋の草原地帯では旅人の姿も無い。そんな中で長安に向かって馬に乗って駆けていく人を見て、羨ましさと望郷の念がわき起こります。

**白草原頭望京師　　　 をめば**

**黄河水流無盡時　　　 れて くるし**

**秋天曠野行人絶　　　 ゆ**

**馬首東來知是誰　　　 するは　るれぞ**

続きまして、の**「」**を紹介いたします。王之渙の詩は、現在六首しか残されていませんが、この詩は辺塞の風物を巧みに取り入れてその寂しさを表現した名作であり、数ある「涼州詞」の中でも、作のものと双璧を成しております．の吹くは、どの詩においても寂しさを深めるものとして取り入れられておりますが、特に、その曲が別れを示す「」であることにより、寂しさがまします。まして、その場所が、春の光さえ届かない付近であればなおさらのことです。

**黄河遠上白雲閒　　　 くぼる の**

**一片孤城萬仞山　　　の の**

**羌笛何須怨楊柳　　　 ぞいん　をむを**

**春光不度玉門關　　　らず**

農民が兵士として徴用されることは、日本でも行われていました。税の一つである「」で、農民にとって重い負担になりました。装備、往復の食料は自弁であり、無事につとめを終えても、帰途において飢え死にする物も少なくなかったと言われています。これらの防人として徴用された農民の心境は、**「防人の歌」**として、万葉集に採られております。そのうちの一つ、の作とされる和歌を紹介致します。

**がかきなでくあれてひしぜれかねつる**

辺塞詩と言われる物でも、将軍が作った詩は、兵士達の作った物とは変わって、戦に対する決心を述べる物が多いのですが、特に、杜甫の援助者として知られるは、優秀な武将であり、チベット族に占領された領土を次々と奪い返しました。収穫期を終えた農民を動員して、奪われた土地を奪い返す決意を示す詩**「」**を紹介たします。｢｣とは、漢の名将であったを指しますが、この場合は厳武自身が軍司令官の地位にあるので、「李広のように」と自分自身を励ましているものと考えられ、敵を一人残らず生還させないとの強い決心を示しています。

**昨夜秋風入漢關　　　 にり**

**朔雲邊雪滿西山　　　 につ**

**更催飛將追驕虜　　　にをがしてをおわん**

**莫遣沙場匹馬還　　　のをしてえらしむるなかれ**

　続きまして。杜甫がその詩に和し、激励した**「の『軍城早秋』に 和し奉つる」**を紹介致します。軍旗が秋風に動かされ、軍営では弓を兵士に分け与えて、敵の陣営に矢を射かける様。既に、敵地の一部を占領し、更に、雪の向こうにある敵陣を奪取しようという意気込みを示しています。杜甫には珍しく勇ましい詩であり、を励ましています。

**秋風嫋嫋動高旌　　　 をかし**

**玉帳分弓射虜營　　　 をかって をる**

**已收滴博雲間戍　　　すでに のをめたり**

**更奪蓬婆雪外城　　　にわん の**

皇帝も戦場に向かう将軍や兵士達への激励と期待を込めた詩を作り、士気を鼓舞しました。

清のが作った**「従軍行」**を紹介いたします。敵襲を識らせるが上がる中で、夜訓練が行われ、これらの兵士に剣を与えると、必ず功名を立てるであろうとの期待を詠っています。

**三邊烽火照軍営　　　の をらす**

**十萬丁男夜練兵　　　の をる**

**但使腰間懸寶剣　　　だにをけめば**

**丈夫何處不成名　　　 れのかをさざらん**

戦果を挙げた将軍を讃える詩も作られました。李白は、のの際、から水軍を任され江南地方の鎮圧を命じられたの参謀となりましたが、**「」**十一首を作りその功績をたたえました。このうち「其の一」を紹介いたします。の活躍により、江南の賊軍が一掃され、漢江、長江とも雁や鴨の住むような場所になったと褒め称えています。永王は、この後、から逆賊とされて討伐され、李白も、死一等を減ぜられて流罪となることになりました。

**永王正月東出師　　　 のかたをだす**

**天子遥分龍虎旗　　　 かにかつ の**

**樓船一挙風波静　　　 かに**

**江漢翻為雁鶩池　　　はってのとる**

王維もに向かう友人を激励する**「を送る」**という詩を作っています。手柄を立てるように激励するものの、辺地に行くと寂しい思いをすることであろうと気遣っています。この詩を紹介いたします。

**欲逐將軍取右賢　　　をってをらんとし**

**沙場走馬嚮居延　　　にを走らせてにかう**

**遙知漢使蕭關外　　　かにる の**

**愁見孤城落日邊　　　いる の**

このように勇み立つ将軍達に対して、決して自分の功名を上げる為の戦をしてくれるなと言う人もいました。功名の為に部下の兵士を無駄死にさせることのないようにと思うと共に、友人の身と、戦乱に巻き込まれて苦しむ庶民を案じた為でしょう。初めにの**「の」**を紹介いたします。曹松は、この詩一作、しかも結句一句だけで歴史に名を残した珍しい人物です。

**澤國江山入戰圖　　　の にる**

**生民何計樂樵蘇　　　 のあってか　をしまん**

**憑君莫話封侯事　　　にむ　ることれの**

**一將功成萬骨枯　　　 って る**

　続きまして、同じ事を詠ったの**「の東征を送別す」**を紹介いたします。始めて将校として遠征に臨む望む友人に対して、戦いは楽しむ物では無い。無駄な戦はするな。功名を焦り、功名があった将軍が画かれる堂の中に自分の姿が描かれるような事を望まないようにと戒めています。

**金天方肅殺　　　 に**

**白露始專征　　　 めてす**

**王師非樂戰　　　はいをしむにらず**

**之子愼佳兵　　　の をくするをしめ**

**海氣侵南部　　　 をかし**

**邊風掃北平　　　 をらう**

**莫賣盧龍塞　　　のをり**

**歸邀麟閣名　　　ってのをむることれ**

手柄を立てながらも報われなかった将軍もいます。は、このような武将のことを**「」**という詩に詠いました。多年の辺境での活躍も空しく冷遇され、他の貴族達に侯爵の位が与えられたことを憤るものです。この老将が誰かは明らかではありませんが、死の内容から考えて、漢の武帝の時代に｢｣と言われた悲劇の名将をイメージしたものと思われます。

**黄河不涸不生還**　　　 **れずんばきてえらず**

**誓斬樓蘭靖遡邊　　　をってをんぜんとう**

**馬放山中知去道　　　をにちて くをる**

**剣穿岩角出飛泉　　　はを ちて出ず**

**身輕大小百餘戦　　　はを**

**節盡冰霜十九年　　　は を尽くす**

**聞説長安下新詔　　　 をされ**

**五侯一日貴薫天　　　 をとぶと**

　趣を変えまして、の「塞上にて吹笛を聞く」を紹介致します。冬の西域の様子を詠った物で、つかの間の兵士達の安らぎを詠ったものと考えられます。しかし、聞こえてくるのは異民族の吹く悲しさを誘う曲である「」であり、一面の銀世界の中に吹き渡る笛の音に、寂しさが感じられます。

雪淨胡天牧馬還　　　 **よくして えり**

月明羌笛戍樓閒　　　**はかに の**

借問梅花何處落　　　**す のにか つる**

風吹一夜滿關山　　　**きて に つ**

次に、辺塞における兵士の様子を詠ったの**「の其の三」**を紹介します。勇んで西域を駆け巡り、敵地を占領してを得ようとする兵士達の様子が詠われています。

**鐵騎橫行鐵嶺頭　　　 す の**

**西看邏逤取封侯　　　のかたをて をる**

**青海只今將飲馬　　　 にかわんとす**

**黃河不用更防秋　　　 いず にをぐを**

　「の」の作者として知られるも、辺境地駐屯軍司令官である節度使でした。

南方での戦闘の途中で二首の**「の」**を作り、その苦しみを唱っております。これらを紹介いたします。

**二年邊戍絕煙塵　　　の ゆ**

**一曲河湾萬恨新　　　の たなり**

**從此鳳林関外事　　　れり の**

**不知誰是苦心人　　　らずかれの**

**隴上征夫隴下　　　魂の の**

**死生同恨漢將軍　　　 じくむ**

**不知萬里沙場苦　　　らず のしみ**

**空挙平安火入雲　　　しくののにるをぐ**

続きまして匈奴との戦いでの勝ち戦を詠ったの**「塞下の曲」**を紹介いたします。逃げる敵将を追う兵士の意気が表されております。

**月黑雁飛高　　　く のぶことし**

**單于夜遁逃　　　 す**

**欲將輕騎逐　　　をってわんとすれば**

**大雪滿弓刀　　　 につ**

次に再び、防人の歌を三首紹介致します。防人に採られた場合、家族と別れを惜しむ閑もないほど急いで出発しなければならないものでした。いずれも、この悲しさを詠った和歌を、続けて吟詠致します。

　最初に、国のの作とされる和歌を紹介します。母親も無く、裾に取りすがって無く子供達を置き去りにしてこざるを得なかった悲しさ、子供達への心配が悲しく著されています。残された子供達は、その後どうなったのでしょうか。

**にりきくらをきてぞのや　なしにして**

続けて、国長下郡のの作とされ、自分の妻を絵に描く暇が欲しい、旅の途中でその絵を見て妻を偲ぶことができるといっていますが、その日間もなく、できずに慌ただしく出発したのでしょう。その和歌を紹介します。

**がもにらむもが　くれはつつはむ**

最後に、生国不詳のの作とされる和歌を紹介意します。父母に十分別れを告げる閑もなく出発しなければならなかった悔しさを著しています。

**のちのぎに にはずにて ぞしき**

それでは、この辺でにスポットライトを当ててみることにしましょう。岑参は、辺塞詩人と言われる詩人達の中で、ただ一人、を超えてに行ったことのある詩人であり、とに赴任しています。それだけに、その詩には、他の詩人に見られない実感のある物が多く見られます。これらを纏めて御紹介致します。

岑参が、始めて西域に向かう途中、のという所を通過しました。ここで、友人のに対して**「をぎりに寄す」**という詩を送ります。長安を離れ、君のことを思うと、年をとるのも早く感じられると詠っています。この詩を紹介いたします。

**燕支山西酒泉道　　　 の**

**北風吹沙捲白草　　　 をいてをく**

**長安遙在日光邊　　　 かにのにり**

**憶君不見令人老　　　をえどもえずをしていしむ**

岑参が西域に向かう途中、たまたま長安に向かう使者に会ったときに作られた詩**「にるいにう」**を紹介致します。長い間西域に留まり軍功を挙げようと覚悟していても、やはり望郷の念と家族への思いはありました。

**故園東望路漫漫　　　 にめば**

**双袖龍鐘涙不乾　　　 として かず**

**馬上相逢無紙筆　　　にうて し**

**憑君伝語報平安　　　にって して をぜん**

岑参一行は、唐の西方最後の砦である玉門関を超えて西に向かいました。岑参は、このとき**「のに寄す」**という詩を作りました。友人の李主簿に当てたもので、何の頼りも無いことの寂しさを詠っており、にあって、玉門関を見るに付けても、断腸の思いがすることを詠っております。この詩を紹介致します。

**東去長安萬里餘　　　のをさって**

**故人何惜一行書　　　 んぞしむ の**

**玉關西望堪腸斷　　　 すればつにたり**

**況復明朝是歲除　　　んやまたはこれなるをや**

岑参一行は、トルファンの地を通りかかりました。を見て**「火山をる」**という詩を作りました。真冬でも熱風を振り下ろすような火炎山の異様な光景は、驚きの目でみられたことでしょう。この様子を巧みに詩に表現しております。

**火山今始見　　　 めてる**

**突兀蒲昌東　　　たり　 の**

**赤焔焼虜雲　　　 をき**

**炎氛蒸塞空　　　 をす**

**不知陰陽炭　　　らずの**

**何独燃此中　　　ぞり のにゆる**

**我来厳冬時　　　我 来たるはのなるに**

**山下多炎風　　　に し**

**人馬尽汗流　　　 くる**

**孰知造化功　　　からん の**

故郷を出た岑参は、二ヶ月もの旅をして、天に至るかと思われるほど西上を続け、ゴビ砂漠に辿り着きました。これから先は、砂と石があるだけの砂漠地帯。を炊く煙も見えず、宿を取る家のあてもありません。心細さはつのるばかりでした。この時作られた**「の」**を紹介致します。此の詩は，新人の作として最も知られているものの一つです。

**走馬西來欲到天　　　馬を走らせて　天に到らんと欲す**

**辭家見月兩囘圓　　　家を辞してより 月の なるを見る**

**今夜不知何處宿　　　今夜 知らず 何れの処にかせん**

**平沙萬里絶人烟　　　 ゆ**

砂漠の中の旅も終わりに近づいたとき、岑参は、**「をぐ」**という詩を作りました。広大な砂漠を道に迷いながら進んで行きましたが、都護府の地は、まだ西の天の果て、地の果てに遠くにありました。

**黃沙磧裏客行迷　　　 う**

**四望雲天直下低　　　は の にし**

**為言地盡天還盡　　　にわん くるにたくると**

**行到安西更向西　　　にするに更に西に向う**

岑参が宿営した地は、西域のにありました。

岑参は、安西についたときで、「にてにす」という詩を作っております。妻に宛てたもので、妻は自分のことを思ってくれているに違いないが、自分の悲しい思いは、分からないだろうというようなものです。

**苜蓿峰邊逢立春　　　 にい**

**葫蘆河上淚霑巾　　　 をす**

**閨中衹是空相憶　　　れ しくうも**

**不見沙場愁殺人　　　のをするをず**

　岑参の陣営からも、軍役を終えて長安へ帰る人がいました。岑参は、これらの一人に対して送別の詩として、**「人のにるを送る」**という詩を送りました。喜び勇んで、鳥と争うように馬を飛ばして帰る友人にと比較することにより、取り残される我が身の寂しさを、巧に表しております。

**匹馬西從天外歸　　　の よりえる**

**揚鞭衹共鳥爭飛　　　をげて とをう**

**送君九月交河北　　　をる の**

**雪裏題詩淚滿衣　　　 をしてにつ**

　岑参は、又、**「の後亭にての使いしてにくを送る」**という詩を作っております。「秋を得たり」と書かれていることから、送別会で、くじ引きで韻字に「秋」を使うこととなり作ったものと考えられます。

西原驛路掛城頭　　　 **をく**

客散紅亭雨未收　　　**じ 雨だまらず**

君去試看汾水上　　　**君去りてみにの上を看る**

白雲猶似漢時秋　　　 **の秋に似たり**

西域での生活が長引くにつれ、家族への思いはつのるばかりでした。その思いは**「北庭にかんとしてをって家を思う」**に著されております。家族との手紙も途絶えがちであったようです。

**西向輪臺萬里餘　　　 にかうこと**

**也知鄉信日應疎　　　る のににそなるべきを**

**隴山鸚鵡能言語　　　の くす**

**爲報家人數寄書　　　にぜよ をせよと**

中国においては、の節句に、一家で高い山に登り、を飲んで幸せと長寿を願う習慣がありました。しかし辺境に手はそれもままならず、岑参は**「九日長安の故園を思う」**という作り、望郷の念を表しました。この詩を紹介いたします。

**強欲登高去　　　いて高きに登りて去らんと欲すれば**

**無人送酒來　　　人の酒を送りて來たる無し**

**遙憐故園菊　　　遙かに憐れむ故園の菊**

**應傍戰場開　　　に戰場にいて開くなるべし**

このようにして西域で軍功を立てることを目的として八年間を過ごした岑参でしたが、その願いも叶わず、長安に帰ることになりました。帰る途中、の陣営に寄りそのもてなしを受けました。陣営の将軍は景気を付けるために、鼓を撃ち剣舞を行いました。しかし、底に聞こえてきたのは異民族の悲し笛の曲。一座のものは、断腸の重いに堪えきれず、雨のように涙を流しました**。**この時の詩**「酒泉の太守席上醉後の作」**を紹介します。

**酒泉太守能劒舞　　　の く)す**

**高堂置酒夜擊鼓　　　にして夜をつ**

**胡笳一曲斷人腸　　　　一曲 人のをつ**

**座上相看淚如雨　　　 て 涙 雨の如し**

いよいよ長安が近くなったころ、岑参は長安に着くことの期待を示し、友人のに寄せた二首の詩を作りました。其の一を紹介致します**。**

**東望望長安　　　東を望んで長安を望めば**

**正値日初出　　　正に日の初めて出るにう**

**長安不可見　　　長安は見る可からざるも**

**喜見長安日　　　喜び見る長安の日**

以上で岑参の主な詩の紹介を終わります。岑参は長安において､杜甫らの推薦を受け、という皇帝の側近になりました。

岑参ほど有名ではありませんが遠征軍に参加した詩人としてが挙げられます。に「を横たえて詩をす」と「の」におけるのように讃えられた詩人です。西域に出征した時の詩二首を紹介します。最初に**「」**を紹介します。「」は、にある詩です。の「涼州詞」もある如く、笛の音は遠征軍にとって悲しく聞こえるようです。

**天山雪後海風寒　　　 寒し**

**橫笛偏吹行路難　　　 に吹く**

**磧裏征人三十萬　　　の 三十萬，**

**一時迴頭月中看　　　一時にをらしてに看る**

続きまして**「にて月を見る」**を紹介いたします。辺境における厳しい暮らしの中で、友人は月を見て何を感じたのでしょうか。

**紫塞連年戍　　　 なり，**

**黃砂磧路窮　　　にまる**

**故人今夜宿　　　 今夜の**

**見月石樓中　　　月をに見る**

続きまして、**「夜に上っての曲を聞く」**を紹介いたします。が塞上に於いて聞いた曲が「」であったのに対して、が聞いた曲は「」でした。「涼州詞」は、王翰、王之渙作に代表されるように「」「」「」とも「」と呼ばれる詩のジャンルであり、悲しみを誘うものとされています。

**行人夜上西城宿　　　 夜　に上りて宿し**

**聴唱涼州双管逐　　　涼州を唱うるを聴いてをう**

**此時秋月満関山　　　此の時 に満つ**

**何處関山無此曲　　　何れの處の関山か此の曲無き**

戦場に送られた多くの兵士は「かる」と謳われる如く、帰らぬ人となりました。は、の墓の上から望んだ兵士の白骨が累々と横たわる様子を**「の**」に詠いました。この詩を紹介いたします。

北海陰風動地来　　　**北海の 地を動かして来たる**

明君祠上望龍堆　　　 **を望む**

髑髏尽是長城卒　　　 **くれ 長城の卒**

日暮沙場飛作灰　　　**に飛んで灰と作る**

　最後に、の**「****」**を、紹介致します。「陳陶と言えば『隴西行』」と言われるほどの名作です。帰らぬ人のとなり、白骨化した兵士達は、そのまま、それを知らない家族がその帰りをまつことになりました。

**誓掃匈奴不顧身　　　ってをい をず**

**五千貂錦喪胡塵　　　の にう**

**可憐無定河邊骨　　　むし の**

**猶是春閨夢裏人　　　 れ の**

（令和元年９月２０日作成）

参考文献等

　『中国漢詩吟詠全集　絶句編』後藤石韜緒、有限会社吟濤社出版

　『日本漢詩吟詠全集　絶句編』後藤石韜緒、有限会社吟濤社出版

　『和漢名詩選評釈』簡野道明著、明治書院出版